

## \* 生物学的概念としての人種

多賀谷 昭

私に与えられた役割は、おもに生物学的概念としての人種をめぐる議論についてコメントすることである。ブレイス／瀬口両氏は、人種を特徴づけると一般に考えられている多くの特徴が実際にはクラインを形成していることから合理的な人種区分は不可能であると論じ、一方、斎藤氏は、遺伝学の立場から人種の成立の可能性について論じている。片山氏は日本の人類学における人種概念あるいは人種という言葉の歴史についてくわしく論じている。以下、この三人の論文を中心に、自然人類学の分野における人種概念とそれをめぐる議論の構造について考察する。

片山氏が述べているように、過去二〇年間、日本の自然人類学で人種について論じられることは少なかつた。ときに必要に迫られて人種という用語を使用することは是非が論じられることはあっても、人種概念そのものが正面切つて論じられることは、ほとんどなかつた。その理由のひとつは、人類学者が過去に人種差別に与する役割を演じたことに対する負い目であり、もうひとつは、世間で通用している人種概念が現代の自然人類学者がもっている人類の多様性の存在様式に関する認識と大きく乖離しているために、どのように取り扱うべきか、戸惑いを感じていることであらう。

人種差別の構造およびその中で人種概念の果たした役割については、従来、社会学者や歴史学者によって論じられることが多かつた。文化人類学の分野でこのような議論が可能になったのは、文化人類学がその研究対象に自らの社

会を含めるようになったからである。文化人類学者が人種概念について論じる場合、自然人類学を捉えるやり方には二通りあると思われる。第一は、文化人類学と共に人類学の半分を構成する分野として捉えるものであり、第二はエスノサイエンスの研究対象のひとつとして捉えるものであるが、多くの文化人類学者の基本的な捉え方は後者ではないかと思う。しかし、多くの自然人類学者はそのことに気づいておらず、その結果として、文化人類学者と自然人類学者との間のコミュニケーションがしばしばはぐななものになっていくように思われる。それは、両者のあいだに交わされる議論というより文化人類学者からの批判と自然人類学者の戸惑いを含んだ反応である。そのようななかにあつて、今回このような議論が行われることになったのは画期的である。

#### 文化と人種概念

人種という言葉は、正しいかどうかは別として、欧米では分類学上の概念と捉えられている。日本でも現代では、すくなくとも生物学的な意味で用いられる場合は、そのように受け取られている。しかし、片山氏が指摘しているように、日本語の「人種」という言葉はさまざまな用法を持っており、その意味も曖昧さを含みながら歴史的に変化してきた。人種という言葉は、もともと分類学とはほとんど関係がなかったようである。このことは、日本人の思考方法が分類学のそれとは大きく異なっているためだと思われる。

分類学は、近代科学の哲学である一神教的な考え方に基づいている。分類は造物主の設計図であり、世界の秩序そのものであつた。神が進化に置き換わっても基本的な考え方はたいして変わっていない。一方、日本人の伝統的な思考方法からすると、人種は誰かが決めた単なる名称であつて、人種区分をどのように行うかはたいした問題ではない。現在は西欧化や帝国主義の時代を経て多少変わってきているが、それでも欧米人の人種概念とはずいぶん趣を異にしている。

純粹に生物学的な観点からすると、人類をひとつの種と認めて人種を種内の変異に関する事項とみなす限り、本質的なのは多様性がどのような様相をとるかであつて、それがグループに分けられるかどうかは、人間の認知体系の技

術的な問題にすぎない。人種を伝統的な用法に限定せず、一般的な地理的品種を示す用語と考えれば、技術的な理由で個人の人種の同定ができなくても差し支えないはずである。

アメリカ人類学会の「人種に関する声明」(American Anthropological Association 1998)やアメリカ自然人類学会の同様の声明(American Association of Physical Anthropology 1996)をみると、個人に対して人種の同定はできないということを示すために多くの言葉が費やされている。形質がクラインを示すことを強調するブレイス氏の議論もこの点に集中しており、変異の大きさよりも、変異に不連続点があるかどうかが重要視されている。つまり、アメリカでは個人のレベルで人種が同定できないという論理が強調されている。

種のレベル以下で形質の連続、不連続を問題にすることは、人種に亜種の資格があるかどうかを問題にしていることになる。分類学上、種の成立については形質上の要件が規定されていないことを考えれば、亜種の成立に関するこのような形質の不連続性という要件は、きわめて技術的な事柄であって、系統学上本質的な意味をもたないことは明らかである。つまり、アメリカの人類学者が人種を問題にするやり方は、形式的かつ観念的な議論になる傾向があり、生物学的な本質とのかかわりは主要なものではない。もともとアメリカ自然人類学会の声明のほうは、「人種の生物学的側面に関する声明」と題しているだけあって、一部の形質にはかなり大きい地理的変異がみられることを述べているが、それでも明確な分類はできないという言明を付け加えている。このことは、人種概念がもともと生物学的実体というより分類学上の概念として捉えられていたことと、分類学を重視する一神教的な思考方法が技術的な問題を過大評価させていることにその原因があると思われる。

#### 分類学と人種概念

分類学において人種に相当する分類カテゴリーは成立しない。現代の分類学の対象は亜種までであって、それより下のレベルの分類群についての命名は無効である。分類学がそのように定めているのは、分類が自然分類であること、言いかえれば、分類が一通りしかないとを前提としているからである。自然分類は現実に観察される多様性を表現

するだけでなく、進化の歴史を反映するものであることが求められる。真実はひとつという、近代科学が立脚する一神教的な立場に立てば、現実を起こった進化の歴史はひとつだけしかない。

進化は種分化すなわち生殖隔離の結果である。進化の歴史は種についてはすでに確定しており、亜種については現在進行中であるが地理的隔離によって方向がほぼ定まっているので、これらについては一意的な分類が可能であると考えられている。ただし最近では、本書のブレイス／瀬口論文でも指摘されているように、この亜種という概念の有効性をめぐって異議が唱えられていることも事実である。これに対して、亜種より下のレベルの多様性については、状況が混沌としており、進化の方向性を見定めることは難しい。したがって客観的で安定した分類は不可能である。このことは、研究者間で具体的な分類について意見の一致をみるのが困難なことから、一致がみられたとしてもその分類が将来にわたって維持される保障が得られないことの両方を含んでいる。なお、分類体系は個体の同定も可能にする必要がある、そのために亜種間には形質の不連続性が要求されるが、これは分類学にとっては本質的というよりも技術的な問題である。

人種の場合、少なくとも現代では地理的な隔離は不完全であり、今後の方向性も不確かであるので、亜種ではない。また、技術的な面では、形質の不連続性も成立していないので、個人の所属する人種を同定することはできない。したがって、人種は分類学上のカテゴリではありえないことになる。

欧米の社会で「人種」ということばが個人の所属を同定できる分類学的なカテゴリとして捉えられているものとすれば、その文脈においては、「人種は科学的な根拠をもたない」と言明することはポリテイカル・コレクトネスにとどまらない一定の正しさをもっている。しかし、人種が科学的根拠をもたないというのは、あくまでも人種が分類学上の概念としては成立しないということであり、人類の多様性の研究に類別的 (classificatory) 概念をもちいることが不適當であるという意味ではないことに注意する必要がある。

## 類別的概念の有効性

生物の多様性は多くの場合連続的であるが、その研究に類別的概念が有効であることは自明である。というより、人間はそれ以外に自然を記述する術をもたない。もちろん、実際の適用においては、連続的な自然と類別とが完全に対応することなどありえないので、さまざまな工夫がされる。個体ではなく集団を単位とした類別すなわちクラスタリングを行う可能性や、分類できない個体を残す可能性、確率つきの分類を行う可能性、新たな類別を設定する可能性などがありうる。

離散的か連続的かは、生物のほとんどすべての特徴において程度の問題でしかない。種内の変異は本質的に連続的である。地理的隔離によつて亜種間に中間型が存在しない場合でも、同種である以上交雑は可能であり、潜在的には連続的であるといつてよい。しかし、この顕在的あるいは潜在的な連続性は、類別を用いたアプローチを無効にするものではない。性別でさえも中間型が存在するので、厳密に言えば雌雄は連続的である。しかし、そのことをもつて雌雄という類別的概念の有効性を疑う人はいまい。

また、類別が一意的であるかどうかとも類別的概念の有効性とは別の問題である。真実はひとつという観点からの分類の一意性は、厳密には種についてしか当てはまらないし、ある分類群を種とするか亜種とするかについても不確定性が存在する。さらに、真実はひとつであるとしても、進化の過程を直接観察することができない以上、研究者によつて類別が異なつても不思議ではない。例えばヤチネズミのように研究者によつて分類する種の数異なつたり、メダカのように系統上の位置づけが異なつたりする生物種は珍しくないが、ヤチネズミやメダカに対して系統学的な研究が無効であると主張することはできない。

## 分子系統学と人種

亜種より下のレベルの多様性については、集団内の変異に比べて集団間に変異が小さく不安定なことから、特定の類別をもつてその多様性を表現することは不可能であると従来考えられてきた。しかし、亜種より下のレベルにお

る集団間の類縁関係も、非常に多くの形質をもちいれば、もちいる形質の種類に無関係に、理論的には特定の体系に収束する可能性がある。分子系統学の発達はこの可能性を現実のものとした。

斎藤氏の提案する六つの地理的大集団を区分する体系では、おそらく個人の所属集団の同定はできないと思われるので、従来の人種とは多少性格が異なるが、生物学的な意味からすると人種と呼んで差し支えないものである。先に述べたように、欧米における人種概念には、すべての個人や集団をいずれかの人種に（あるいはその混血として）分類すべし、という非生物学的な要請が含まれており、この地理的大集団を人種と同じものと認めるかどうかは微妙である。しかし、それを人種と呼ぶか否かにかかわらず、遺伝的特徴に基づくこの地理的大集団は、人類の生物学的多様性の研究に類別概念をもちいることの有効性を示しており、その内容も、従来の視覚的・形態学的特徴による人種区分とかなりの部分一致している。

現生人類が出現してからの一五万年から二〇万年という期間は、人種が分化するには短かすぎるといふ意見もあるが、単純にそうとも言いきれない。地理的な隔離と自然選択が働けば、種分化でさえもごく短期間に起こり得る。例えばホッキョクグマがヒグマの仲間から種分化を遂げるのに要した実質的な期間は、化石の証拠から、わずか二万年程度と推定されている（馬渡 一九九四）。ホッキョクグマとヒグマとの差では、視覚的な差があまりにも明白なので、体色の違いが人種差と同様に不当に大きく評価されていると思われるかも知れない。しかし、両者のあいだには、頭蓋骨や歯の形態に明確な違いがあり、種レベルの違いは十分に存在するように思われる。

文化をもつ人類の場合、環境の変化が形質に及ぼす影響はクマの場合よりはるかに小さいので、同列に論じることができないが、文化の発達が逆に集団の交配構造や淘汰圧を変化させ、それによって変異性が高まる可能性もある。ブレイス氏が指摘している歯の大きさの集団差は、その一例とみることができよう。なお、遺伝子レベルの差異の大きさのみで系統進化上の位置を判断することはできない。遺伝子レベルの変化は適応的な意味を持たない中立的なものが大部分で、差異の大きさは分岐後の年数に比例するだけだからである。分岐後の年数だけを尺度とした場合、例えば、タイやコイなどの硬骨魚類はエイやサメなどの軟骨魚類よりもむしろ哺乳類に近いので、魚類というグループの

存在を導くことはできないことになる。

#### 文化人類学からの批判

科学者は、自らの考察を固有の分野に限定することに甘んじることによってはじめて専門家たりうるといふ側面をもつ。自然人類学者が、自然人類学という学問分野において純粋に研究者としてふるまうならば、斎藤氏のように人種を捉えるのはごく自然なことではないかと思う。生物学者や自然人類学者によって一九五一年に起草されたユネスコの「人種と人種差の本質に関する声明」(UNESCO 1963)は、人種を遺伝的な身体的特徴のみに基づく便宜的な類別として、つまり純粋な生物学的概念として定義しようとしたものであり、自然人類学者が純粋に自然人類学という学問の中で行う思考のラインに沿ったものと捉えることができる。しかし、人種という言葉の内容自体を刷新し、それによって人種差別に対抗しようとしたこの試みは、十全な成功をおさめるにいたらなかったようである。

一方、文化人類学者が人種概念について論じるとき、その捉え方は自然人類学者のそれとは多少異なっていると思われる。文化人類学者が純粋に文化人類学の研究者としてふるまうときは、人種やそれを取り扱う自然人類学という認知体系の存立基盤である現代の社会や文化の文脈の中で、人種という言葉や概念がどのような役割を果たしているかを論じることになる。

文化人類学の視点は、自然人類学という一つの認知体系において人種概念がどのような役割を果たしているかに関する考察を含むはずであるが、それは自然人類学者自身の人種概念に関する考察とどのような関係にあるのであろうか。特定の認知体系の研究において、文化人類学はその対象とする認知体系が用いる概念をその認知体系固有の論理に従って位置づけるはずである。生物学的概念としての人種の場合、当該認知体系とは、自然人類学ということになる。その論理そのものは文化人類学者からみても自然人類学者からみても同じものであるが、それが自然人類学者にとっては自己の存立の基盤であり、文化人類学者にとっては相対的なものであるという点が異なっている。

このように考えると、人種概念をめぐる議論において自然人類学者は大きなハンディキャップを負わされているこ

とが分かる。自然人類学者が文化人類学者と議論することは、いわば人間が神様と議論をするような関係にあることになる。しかし、その一方で、幸か不幸か文化人類学者は神様と違つて全能ではないので、自然人類学者という原住民のもっている特有の認知体系である生物学の論理については、必ずしもそれほど明るわけではない。ただし、竹沢氏は数少ない例外であつて、その視野の広さと知識の深さにたじたじとなつたことを告白せざるをえない。竹沢氏のような例外は別として、多くの文化人類学者が自然人類学者の人種概念について批判するときのやり方には一種のステレオタイプがみられる。そこでつねに持ち出されるのは形質の連続性と類別の不確定性である。

人種概念に対する文化人類学者による批判が、つねにこうした形をとるのは、おそらく、文化人類学者に特有の思考パターンが関係しているのではないかと思われる。自然を連続とみて、その中に恣意的に境界を設けるのが文化であるという言語学的な考え方は文化人類学にとつて基本的なものである。つまり、人種の類別に恣意性が観察されることをもつて、人種概念そのものを自然ではなく文化の側に属する現象であると短絡的に捉えてしまう傾向があるように思われる。

連続性の中に設けた境界をどう捉えるかは、考え方次第である。言語学的アプローチによるならば、それは完全に恣意的と捉えられ、必然性がないと評価される。一方、生物の多様性の研究において基礎をなすのは統計学的アプローチであり、ここでは、恣意的かどうかではなく偶然かどうかが問題になる。これによるならば、境界は恣意的であつても偶然ではなく確率分布を含んだ一種の必然でありうる。

文化人類学と自然人類学との人種概念をめぐるコミュニケーションの多くに、このような問題があるのではないかと思う。どのくらいの人々がこれに気づいているのかは確かめたことがないのでよく分からないが、文化人類学者も自然人類学者もそれぞれ自らの論理とその適用によつて導かれた結論の中にとどまっている場合が少なくないように思われる。私自身は、文化人類学者によるステレオタイプの批判が時に断罪にまで発展しているのを見ると、文化人類学者といえども自らの認知体系を相対化することが困難であるらしいことがうかがわれて、ほほえましさを感じるが、異なる感想を持つ自然人類学者も少なくないであろう。実際、一部の文化人類学者のホームページには、自然人



類学者にとつて、ほほえましいなどと言つていられないようなヒステリックで侮蔑的な表現も見られる。

#### 人種概念をめぐる議論の構造

自然人類学者が人種概念に触れるのを躊躇し、理不尽な批判に対してさえも反論を控える傾向にあるのは、歴史に対する負い目とともに、しばしば議論が不本意な枠組みの中に位置づけられることがあるのを恐れるためであると思う。私自身、これまで人類学の教育にかかわる際、人種について触れることは極力避けてきた。それはほとんど無意識に近いものであったが、内省し、問題を整理してみると以下のような構造が浮かび上がる。

人種差別の本質は、集団的な差別であり、人種はそのための標識として使用されているにすぎない。集団的差別に利用される標識は、その機能を考えてみれば、出自集団によつて決まるものであれば何でもよいことがわかる。実際、人種のほかにもカースト制や部落差別も人種差別とまったく同じ構造をもっている。これらは、たまたまもちいた標識がそれぞれ異なるだけで、本質はまったく変わるところがない。その意味で、黒川氏が部落差別を人種差別のひとつと捉えているのは正鵠を得たものであると思う。

差別がどのような標識をもちいるものであろうと、それを解消するためには、その標識ではなく差別の本質に直接働きかける以外にない。実際、これまで差別の解消のために効果を上げてきたのは、社会環境の整備や経済・教育レベル向上のための政策であつて、標識の妥当性についての議論ではない。差別が存在する限り、ひとつの標識を退ければ、また別の標識が利用されるのは目に見えており、事態の改善には結びつかない。そのことは、部落差別の歴史が証明している。また、合衆国の反人種主義運動においても、新たな局面が開かれたのは、標識としての黒人性の否定ではなくむしろ積極的な評価によつてであつたことを思い起こす必要がある。

しばしば、生物学的人種概念の妥当性が人種差別と結びつけて論じられる。あたかも、人種の生物学的多様性の研究に類別的概念をもちいることが人種差別を助長すると言わんばかりの論調にも遭遇する。しかし、個人や集団に与えられたり人種という類別は、人種差別にとつてたんなる標識にすぎず、差別の本質とは無関係である。差別の本質

とは関係のない標識の概念の妥当性を差別と結びつけて議論し、あたかも差別の原因が標識の概念そのものにあるかのように論じることが、意味がないどころか、三重の意味で問題があると思う。第一に、本質的でない議論を喚起し、それに対する反論がその枠組みの中で解釈されることによつて、差別の論理を利することになる。第二に、そのような枠組みの中で標識の概念の妥当性を主張することは、差別に与すると受け取られることになるために自由な議論は行えず、公正な議論にはならない。第三に、標識の概念に差別の原因があると考えること自体、差別の論理を認めるものではないだろうか。

もちろん、差別の目的で標識に付加された意味を批判することは当然だし、差別に与える社会的影響とは独立に、標識の概念の妥当性について学問的な議論をすることも必要である。竹沢氏は総論で、人類の生物学的多様性の研究におけるサンプリングやラベリングが人種主義的な先入観によつて影響を受けている可能性を指摘しており、その議論の枠組みは正当なものである。例えば知的能力の人種差の研究への批判として、この指摘は非常に効果的であると思われる。

なお、人種概念の当否は別として、「モンゴロイド」「ネグロイド」「コーカソイド」などの名称は、片山氏も指摘するように、生物学の慣例に従つた単なるラベルであつて、先取権の原則を適用した結果もちいられているものである。日本の研究者がモンゴロイドのように侮蔑的なニュアンスでもちいられることが少なくない名称を使用しつづけているのを揶揄する向きもあるが、日本の自然人類学者が学問的に誠実で、かつ人種主義的な傾向をもつていないことの証拠であろう。それにしても、これらの名称をもちいるのは、もちろん、それが有用であるからであり、その点では、少なくとも日本の自然人類学者の一部は、生物学的人種概念に一定の有用性を認めていると考えてもよいだろう。ただし、先に述べたように、その人種概念は、個人や集団の分類可能性を前提とする欧米の人種概念とは異なるものである。なお、「モンゴロイド」「ネグロイド」「コーカソイド」の区分が多くの場合に有用なのは、それが基本的に地理的区分であつて、人類の集団形成史を全体として比較的よく反映するからであると考えられる。